特別
へ12
5122
1

義経記巻第二

くるまのたゆく若狭富よりのぼりたる人の事

うもしくこゝやこちのたゝとゝろなれを人目もはゞかるまくてあるとゝもの多るのすゝ色なりたやかるうねなとしのりれそれ入てそ物かくるさけ三ちんきてちやうしや若狭う袖よりつゝみてゆくそもしくは想ん寺を一年か一度二年よ一度はみちをとゞ成らぬ事なりさいれやもあるまほといけるゝ子ゝをりゝ事あまうけめなりは義八たゝあるそたゝ一人の他人りとそゝひりたてこしをなゝ又他人ゝもなりとそやうたやはるくゝとはゝゝ成りてありれなる事やもうはなおし

K 2019-757

おいそがてもためくうまれるす
ばみちらんこむーの
はあ事いさ乃おくちしておそ
ぬゆるまひえさ海乃ゆうやはとのくたち
ふをあーもたうひさをぬものれことのすえば
をあくをくたてまつりさうやりうんをひし
もうをあのゆさりんーーのたうん家やりこうち
こめられくおえすうそゆーせひたんしておりひうち
のふうのうをうくくあーらへまりてわさ弟
せゆへうをふえくいをふくうとと云事ありくれなれ
をうれふうへてもうくれなーとーあれをえちし伽
それすてをひりすえのたたーえをれまそはうーられ
やもちやうーわ人をなふうをいちうへとそ乃うえ

ばたちておさなふの人乃神をひかりうこさーきんふを
たてまつりさけすくめて萩ふけあれこけの乃ことをそ
入まう右況をさけふをひてゆーよりうれ萩くく見
のたゆくかおもをさるうーうありられそのとーそ
世のゆーれをんなわられくてを乃ゑよゆをけうせん
とうの大ーやうゆをのたゑ命とゆーをのえちあの國よ
ゑとをうくうひき乃こかりの行人ゆーさを乃入道と
ゆをの二人かうさらひあれくゑよあをてさん乃あん
乃のを乃をうくたゑ命とをたうみの國うりさのよ一
するうのくふよおさたのナ云うつ弟くふよぜよ
れか乃源八以下の老をりつ猿をえこゆうぬすんむも
よの老二十又人うれせひせ十人つ猿てをうひう

きをひをすあーようるんやさうしくふいてこつけを
とく人あるをあいはるーてわうくくもふきうある
さけ弦はませてうやこうのわりなつをさあをりせ
たくをうつあくうくまくふへくうんそやせ
くやさのしくよをもいつをはーらしてはかつをたる
うれ抜ドかこをのをゆくふちやうちやのくき弦なる
をてやをもたるゆをハ本赤ゆーはをうよけうを抜
ふをあくうち若沢とをこうあを人あふーうをくく
はうてはかをれうを掛ゆうあようひちやうーやりて
うやうるをいくをつをのやいひをれくゆしさを
八道をゆしん風うか弦あをさかりれしよをて
をやけのあをなひをのくうてをうくうせをふさけハま

をくう弦をとそいてたちけうをけきやうれあーかう
せをふ六人はるーまきをきてあ
まつをふ六をたいう史弦はをて天よはーあをかれしふ
をくくうれくをうちをはゆ中ハやうよあうりゆを
れを幕とゆーさをハ道をそ大ーやうくてうれせい
八人つ抜ていてたちゆををうくもえをれひくたきふ
もうをはくーのりくまをくをかりをはーようけしく
三ーやくをすのたちをきてむろゆーさをのちんれひ
あくをうくくろうをはくちのをのをれひ
ををめくろぬをれたちよくをはをふをのを
大なくるをはえうつをを抜くんくくをかちやうをちや
ハりくハうちいるをたうをはくをハてみをやをも人をなーゆ

乃ゐのいとそんれともいつなる事
そとてけんちうゆくきり入てたやうーゑ六けん
きりたゝを吉沢ゐきゐおやろきりとをきてゑんきて
鬼王のしくゝて出ゑゝ是をのふゝのかさいけう
ゐ目をうけていくゝる沢たゝをきんしをそーきり
あふーうをくゝれ事一六りゝへやゝてうつてむうひ
ゝうとゝゝろ是てゝゝ沢ゐ沢ひくをゐて
ゆけうけゝしやれうゝのあき沢ゐ沢ひくをゐて
人のゝのむまーきものをつゑ乃もゝそありゝろそ
やかゝゝ乃しゝくもゝふひなゝゝうくをあふまーき沢
をゝてをゝくゝても沢ゐ井ゐゆゝちをゝた
うゝゆゝよをふうゝひをゝうくみゝたゆくゐさゝす

てしゝそ大ゝゝ乃うゝうはゝまきゝつてひゑきて
たちゝゝをれよをゝをうゝあやのゐ神ぬくうちゝゝ
き一まなゝをやうーしれうちをすゝゝと出ひやうふ
一ゝゝろひよひゑゝくゝ見まゝんよをーよすゝ八人乃ぬを
人を今やゝまゝゝ沢ゐ吉沢めゝ自はゝれをゐくて
れゐひてゝくれひやうゆれのけよ人ゐゝをゝたゝて
たいまゝゆゝてゝくゝあ者見れをいゝゝをゝゝもなの
めなゝをなんと山門ゝうゝ沢ゐくゝゝちこくゝさを出
ゝゝ人ゝる事なれをきゝめてゐゝをゝくゝひゝろゝう
まゆゝゝくゝつゝゝうてきぬゝゝうゝゝ沢ゐひゝるとみき
をまつゝゝさよひあひきゐゝゝるゐ乃をゐゝとゝしねみる
れゝくゝんゆゝゝまゆすゝれうゝひをゐゝを風ゝうみゝれぬ

色くそうぞえたまふりんそうくもうてのりのぢなわをし
やうきひとをひつへしりんの姫てひのとれなくを
まめたちんうとをうとうふつしけひせひとあくろくて
ひやうめまれーさとひてそと波をけり人をなふやう
うおもれていふてをなふのあきあるへふすをの
せいいくしまれくをーしをのようーわうせいふ
をのむりんをれあーあふーうをくをふとてうくをの
をゆくをてかうをうまあひてうひなふいれちいきて
いをまるかをなくをけ大ーやう大をんまあくをを
おろうなるぬとくいをれん事くをうりられをて
もうくてものうまーやをなをーめてたちはめふれ
せひのゆーをけーをいるをたまふ八人をけうををつと

ちれゆをのをあるあきぬみくめうめをおりひなまををふ
めうなる人をてありけりるをのをををさんしくふをう
あふ一たちふと思ひてをのをくをむくひてひをとうの大
のおやをあのたちれをんををれひたるを天井の姫ちふをち
うちつくぬをひふのめくをくろはこをちをつてむ
ををうけをあゆんをのうのなお神をそんをめつと
うちはくうををたちふくひをうちれとひめーをを
入道をあきをみくあくをれいちををひくふをて大
なふるをうちめをまをけーをうくをれうくをあひ
てをんくふをうあひのふめーをを入をうれきふた
はくをなのをくうてするををとりーくをけーをうく
をきをををふたちををこゆうれうくをのなわをれて

なさかうの清のけんとゑつまてそはてさんけりるやうて
たちぬきあてもせりる沈ぬゑをりてさ袋をさつとつ弟活
てそうふとのまへのうちやけてゑつたを活ひ
なりを沈をものくうけうまをてあきをゑておろ海きね
れあるまひうねりうかまをきたなーとおほーめす
らんとおりひ姫したるとろちやうたい八つけと入
はまきをとけてれりてらるときみさしたちをぬゑ
てゑ乃すてらるいまつうち姫ゑ大遊ゑもちりおく
しやるようねと一けうなりて知ふけまくけつさん
くゑをうひくけきやうの老くもゑ六人やまをふ
きうを活ふ二人ををおひてゆへゆく一人知いうり町て
のこれぬを人のこらたおちうせよりりあくきてやも

の家乃ちつ迷うゑ人のくひ沈うけ姫たをうきてそ
そ人ら迷てるをとゆもくらん国ゑもゑよてこの函
乃住人ゆを乃を幕之ちあの國乃住人姫ーさを代へ道
いトれくひゑ人きりてら沈ろ老なふ相とう思ふらん
こうひあゑ人三てうれ若沢のたあをゆうをあり是
所十六をそれうぬをさよくを見ーゑむひをきくたくい
くまのとうををうをうのりてをてきけせうあんゑ
年二月四日くそ書てたそらきける

そこらのちまきをけんーの門出をすまし
をさとまひておちあひるるよりはうくみをたちはひ
ちう若沢をいとてーつをかまりてそくらりけりそのの
よをつとるをあをきてちんをはあうひをきまれをあふ
もほとなくゆきくれてるしをのくらふあふちうのをゆく
ようそつをはふあまをうーをとをあさうーをおりひはひ
りうちやうをやうあとるりあふ乃中一文たまの乃はう
とうろとうろひはひてはいそのうの数とくもうかけ
きやうとくをのしてあくまをそをを俵りうつう
りんしをうきてくやうしてそら後らきけるこやを
乃をうはようそうをしをせのをとうちまをををのまう
川はあををのようなのめそと弦をはく者ふも三四よ成

されしをりの間あつたれうやよつさのひとり
ちやかうとのりんかくの事
あつたのされは大きうしもの一うとなわ
いさの大きうしをこうやなわひやうゑのをけゑ
の母あきんもあれのうとのをまをいふとろよそ
おきゝまする又は所のさんとおほしめして
てやされあれと大きうしつきはむうひろんを
まのゝせいきをわやうくゝ
りやつていきれはあくしんとゝんをさ海くい
さめこゝふまりとうくすろ祖ろ三日まてあつたふ
うおきゝまをしやなとうとのきらしかおかせられ
りろをちこゝそくゝりんを見ろしろを海なり

くもきそくをゝつやと思ふをいうふをつゝ若沢いう
やうもはろゝひゝんゝそゝりる大きうゝ志ほう
まをとるとあをを海ゝをめされけるくてトつをひく
ひろのゝをゝなふとりふゝと向りんうちやかきう
とりふゝおやをころなわろうひなゝあをまをて名河
うををきくゆうをさくゝあをれんかくせよとりをれん
をもんひて元ゝをまをしくのためまを海うてん乃若
なり他れをちうをあるうの四神れ海
海人ゝうも兵海れ作義乃母はおをあをまをおゝをまを
あをまをて思ひうゝんとをゝりんをいして
大的祈ふは多りあり大きうゝ若沢もはゝも結り二
人ろ仏ろをさ海のの四うれとのくよとも嬬よあく

源太二男やすもりの三男ひやうゑのすけ四ろうゑもんの家
ちんしの君六郎をきやうのきみ七郎をあくせんた
のきみ殺をさ海の八郎とゝいはるゝ人ありうゑん
の合戦小勘ちちんせひの八郎名をあらはす事
なれどゝれあらはつりん事ならずなりぬせ
くるーかりうまー殺をさきの九らうといるゝ人したち
こやうもおかちいためよりちくもあるを見をさう
ひゝとやけるわきをうつひとりをきんうてきのふ
きそをしわれまうとの者小ふをさきの九らう義経とな
をうゑて

あつたのこやの紙うちをさなふとなりてのちかひかさ
三河の乃國八はしとうちあしてゆかうみのをまなれ
はしとなのめてと紙らせ給ひひろはをなりゐ
やさうけ中たやうるくのなりめりめひたよく
おかれとそうしわのとのうちとけさとれしろ
れも給れおりひあるゆををあもなおなをとて
うちをきぬへをうれ山うちをきてするのなりうえ
しあのはるそつ給ひりる

あれくせんしかはたいめんの事

これをあのくきんしの法りとへはかうひまの
せのひりるせんし大ようろこひ給てはのうし
をへをれうひろ御目をえめをせてをすの此この

事とも此くさつ給けこさひむせひ
給ひけるゆををれはるるうの此
なり給ふあの田ろをいつくおれえするこをしを奉
らひこれほとうせひたんしこうの大事をなりひ
たちのふうををさよををもるをもようちして一所をて
やもの此くもなわたくうへとををさくしやくうんの
きうほう紙まなんてちんしやうのうんしかへし
ををあの此くさんををすをまようめをををうちう体
よろひきうせんはたいするるいうおうやと思へを
うちつ猫たそまつらひろうをの此ねれ法かさひ
をもたををうをとふらひたそまつらんのいうを一月れ
人をのいれりををう社をれいををんすれ一ケ月をたふも

うひなてしまつらひたてれき
ひやうゑハをけとのもいけハやうてうかれてしませ
をけのあのものこをきうひーをたゑ西ゆーまつこゆーせ
をふををたふ寿ーをすちのさをころをこのみをてを
とつ殺をなーゆ寿をとてをけをひゑ寿をたをりん事
ゆてうなれをえうきこをきえ人をのやうゆやーへしと
仍られられしえのををあとふとくめをき

されは伊豆のあく田よつき給ふ哉もきうりきねん
まされけるを重忠見さうたいしやうちんそうさうあん
くんさちしやうこ滴所さ孫らくえんりしつ国を三十
万騎代大しやうくむとなしるた給らぬかうしけやさ
まま所へあしさ我給ふなをせんくとはくしきせい
しふまひけるにう十六のさいのまにまにおかう給ひきあ
うくん者うちまきてむ給しぬくおかうつ国の井をまをそ
うみくさひこ中しやうのなかのめぐるみのきさよし
みをと思ひてたまつ遠乃國しやうたのみとりふところ
ふつきぬふ旧のきてみるままさうひてさやこをとをく
ひしきちのくなるまくまされ我を起れるすれはし
めいてされけるやせ乃あるし誠めして是をいつく

の西うとはらひあひ有れくたもはきれくかとやなる
けそうろをこおりのしやうのたをまつ遠乃しやうをそ
なけるあのしやうれつきやうぬしをたまと云うせうか
あん信西とかーしし人のさくかさのおちゑんさしきの
をけとす人のちやくみさしきの出湯とをそやけける
よしつ国見給くさうおちやき給ふ事
きつとおほしめし出されけるはよしつ国の九州の年
く海うありてとうくゑうそうれひきの乃うんか
孫たましとさあちれおさかなる人の法目れしきや
いうなる人乃きんそうまでわくらせのひかやうんと
いひしうも是にうき海乃のこ我乃きんたちとの給ひ
たうもありれすると乃せに平家のためにを大事なり

さ人こそまかりてはかんきうせられん事なり
さくらもとの千里の野辺にをなつてあまたせいをそんそ
のひはもくそけちやうのむかんまてあるへしおくも
おもむせ経んせんのるまはりんときは(?)みち(?)はく下
野の國ハしさもはなもやとしろにはとりひしなれ
はるくとあふしうへくくらんよりもさしきりも
とん経のやせおほしめし吉次もし下野れむほや
しあまてまそよしはるを人はたの経てやりておもひつ
りんするそらて見はこれうりとをそおくしける吉次
をあつろなしをされれちまつりせんとあふしうへそ
くたりける御はうしそみさこきうたゆくたよをう
とつ経てはらんするよせうりありしもおかしまて

門よそへうおさ馬やまもうれうすゑたてらるはしのそ
きて見れは人をらはさふへひよ吉おやまれかのさとの五十
人はかると升なりは達たのはいはしくし人まゝ経てはゐ
うけあれなひはさんとの経ひおれもりつくよなそと
や京のおさうりうにあの事をとやおれもりつやう
はとおかせはるしういてけれさんふ入てはそのまて
なさ人とやそんしやうなる人そてはやせりんをさうを
あまたをとやもとそて入まろ見はくものなる人まてわ
ふこ世経ふる也やあれもようせうまてかんさんよ入
てはしはらんしかとき達はやくつまのやうらとう陽
つのひとつてなふ事もあつらむ時たつ経よやはいひ往
うぎまうすたのつんあかてくさつまはやおかきりれかれ

をみさしてあの事をきくてうれしく事こうなけれ
せいたんたうよりやくもをみかゑよのりて小松ねの
はうちうのあり日をくのうん一かをえをきて二人
のよくをいてことはくふなうへしとかりひをつくひてた
はくくうちあんしやりをさうけはれはてめ
くせはひいりあまつてしうへくも平家のらんの時
すてふきやうたいちうきくれいつをせてうたゆしや
うの叶とよきをくちのはのせはひてうれをうー
うをいのちたすくせのひぬらうせうぬちやう
のさうひさくめなる事ますてゆへくをきよをりう
うもなわはひてのちれはてめたくせをへ叶くを
たれくはたはうー安をくありれをやつをはりん一れ

ぬくへあすてあのりやありれくをはてめりれ
くをちのくをよりすをはをくくたのひをりたのまれ
はくんをのゆへかーうをんもあうへうよくてうれ
うの我くんはうをうえんはくをきのいをよやをうはく
のくれをなくさんくかなをへはくひてうくをすやう
うくせはひをり

[illegible]

ひてはるまそゝ野のよこやさかりゝむろのやゝさた
の〳〵川関山ゝ人をつまられくかるふまゝとかたり
めてすきたる河内をひさよまりせてあゆ海せ給ひ
なる道ゝるゝあるなやまて二日ゝ後ゝをけるゝ所ゝ
一日よりゝ法きゝ関ゝさゝれとゝふゝゝゝゝゝ
給ひなり

りせれ三郎義経乃ちゝふけめてなる事

ゆもすておくれゝるさまなりぬ方ゝいかりゝ乃ゝ成
なゝ色ありゝれゝ一枝あゝ乃ゝのふゝゝゝゝゝなゝ
ひゝ入てまゝ一ゝありゝかゝけあゝかすゝゝめゝ給ふく
てゝけゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝりみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

さけあつまりてはらんをれをまをようちいるまうんれさを
うりもまをひてはうちかは超やーさんとおかをまれを
十二三ちうとなるけーうのものはくなかる事とやー
れをあのいをまをのれどをかうかはくなーれ老
をなるかう人あーもいてよりかつをり事かうそうを
されれをーうかはやうをかくはあーみそうーうろ
十八九ちうをなるめれ月ーうものゆうなるのひとまの
をやうしのうけーもをかよるーはうとやうれくーを
をれすてはのうーあくりたうーとーろへ人を為
てくうりはうあの趣んのあんなひをーをはをうや
くれぬ一枝りやをはのさ様殿へをおかせらきはれを
おりけるをやをきほとりるうまをはへをあーまを、

はうをのありをくはのこうひ枝かけてーう来をはりん
をを人ーうたうひてかをけはかをとのまをはりのなる
事ををのやーはりんをもんそれーうはたありてこはり
月はりへりーをつをかうりのかーさへをは入ーう人町とや
あれーとりのーいーせのひてーむねんりるりはーうれ
ときーうーうーを為を野亀色をまーうをりてはりめとおかを
をーれあれーしおりりひみーをしたりの浮はうーこよひ
一枝をーをーうさ様はへはいろりをものををを人ををる
ををを様をかをひをするをとーるまををををーをるおちを
ーうををよりすーうちかはておやをなーき人かりーうよせん
すーうをーりひあれを一りのなーれ様くむもみかあき
れーやうのりをきりなりはのーくるーをはりをりをとをふ

らひきのなかまにこさんなれとおほ
くをしへてとりてくしはさけすくめたてまつれきとも
をあしもやいきさりけせやきりをき家れあるし
をせこはやしくうろをせ者をそしいうをそくみしさ殺
ほうかはとも一火ほをそんやうーをひまたてくはし
やすをいへハこをのうをもなかひをくはあるろのし
のかくこハいうをきしくはいてくへをしやーあれをあいぬ
とおかせりをいうなるおくことをりをてあき祖うをそ
期らんをのきのおとあかあをしうをんさをきかを家よ
なかひほをのうをさんしくかやををりをひくをきをてををを
はうをそしまをてやいをんをんれのかさけあをそをく
めをうんよれやこを来をあかけなる事いをいう

れうあをうのうをうをうをあきこさんなれとおほ
めをたうめをうけをひきのををあきひたくれのを神
をうかかうけをそを孫いうをしをうまうはかふたをそを
とやはうしやうーををををかひうくあをあをはへ
とやはうひををいをたうくをうをををくをの
れうををうをいかやくをまうたまかねのをく
をうをかなうめを迷をあかしーのおやをこうをををきの
いをやはををひををうをうをを後れををんはへをををを女
四かはうをなるおとあのあしれおうをはをををうあを
きれひをくきかもかをれをををのはををきをうをうをを
いてをのてかこはをえをのをかれををぬかかをう四ぬ人
いれめかうをうきをををのなひををなかを

ちきりをもちてあくいさこと
かあるふうけしきなり四天皇うれしくまうていて
れうとめの文をとりておもちはりうをとこうねやきやつ
をけなけなるものうねとそはらんしけりうの男二
海うへ人ありやみくくつぬるをけりる大
のまるこゑえいこえてたちとりるる紙しあきをとそ仏
られけりる男をけしうぬ人うれやなりひて色事
もやさすしやうしひかたてくあうちよへ
いうさ海うもめよあみてはくあなるるいそれんを
らんこはりめてうをうる男くとあてくきくぬへ
もなこせんくやはしをとりうせをもけいをもも
をすまるうおして祈はめうぬせひていうよとを

二海うり祈うう人をたまやいふまもたうぬ人なり
くそよけりるされとををうまきをたうぬ人をそれとあの
なるめとかたまきのうううひひかなさうそとよかあ
けりよやはれしめそこと出きうそときあしめけるる
ほてよめやけりるをこうをたうぬ人なれうをはをくれ
ぬゆきかこそう波しこうちはひつ猪とを人の
はううまさぬあとうとあるあうせてをはあとをのす
をもしをかこうれしうなはけとやつ猪せいろをもう
をまるろ人うをはとはかせうられはうをとをまうち
てこうひのやせをまのうせはうなりうなる事の
うもこよひちうをなおうくうりつかとやうれ
をあくこさそもしくわこせんををたうのをやあのふ

くろあくろをあつまのかくのうえにはよろずおりひけろ
うりいろをもかをもちるる人うちにれやおかきられけろ
ことにのすをたをまれ海へてかへぬうろやけられ
なふ事ありうちもくろしうるまえうこよひ一枚
をあのうさせまいりせようそやけるけうーありれ
ちるつさ海つたんのはめをみうれかくけなる事所
たふもいたくゆくしさ大るうを出あんとおるーめ
けるふあるーりひるるをなふさ海かもはとのいうく
人まそをなーちのくん三日やはくん七日のうちう
事まあふうる人まそあるうん我も人をせまなー
をのちうしちうあふるつひれ事するけ海
うけとゆーさりやとそさ海くのうを見しやるもく

のをそをしたうのまひいちいうこのをてせうれかた
てくこまかまりはうけすくめまれやもあをくきあ
りうさうすあるをやりうをはうさけきあーめりん
りうさ海はうちんとはかくはをかくうあやーの
れまそはとをはあのはりんはうほとそはとのの仕
はへてし人をなかうやをよひをれをは天れくなる男
又六人かきさるはきやくちんをまうけまりそはうう
たんとはかえはとうひを孫ら君はかはうのはの
つ穂とりひまれうけたさをはとりひてひめれ
はとゆをのはうをしうるまなんうしてはとのいはう
まりるりう為をてはのしやをみあをてとうたい二所す
うそくりうまさうつてそをもはをきゆををしうるまや

たちねらひてをーをけろ
のたてこかをきあたりをおいぬ
かえ風の木すを志ねなーす
をもろれあまきさきをそや
ーけりろ氏ろうーーあろれ
をやつを苗なけをものうの
空ぶ風ーめーろりあくれを
さ海しくろうをめ者りろを
あくよ二三日をくまろのひ
をろをしくをやあまををいう
ひいろまれをもを海人もいる
まいあへーいを一夜日氏
山道へくらを世ぶひいをを
まをれをろ者をへしとやー
をあろうなろらんをの

ゆへろうをひら者んといを
みろか二ひなんををよもあ
めあまをあふーうの叩をを
らんろうあろひーをもつ者
うーろををくを海か叩をを
おやをこかなわてさ海氏九
ひて元をを氏れのをてをを
ろうなろ者らめと氏けるを

なくもあるをはとはおろかにあつてはたりとうるを
つゑのはしくくとなるかあ〳〵むさんやらひたてまつらん
そりうてのちりをはらつまかろうるきしくうたためよをちう
代乃きこうてをうこせはひりものとやくやをし
いのなる老うとゆかをらん親まそいり老をりせの國
ゆたるの者うそいの伊勝乃かしらひうつくとやて
大祈家のりんぬうそいひりるのきようろへゆうて
下向をりる九てう代上人とやゆかりあひしを是ゆ
さひくをまそのうはをれくゆなりしゆをやとろろよ
なのさんをらをて手母とゆくらいひるるかこきやう
わをりんのうあうさいしをまうけていひりるか
くをいうんして七月かなりいかうんらひは牡よはしや

めんをなくて山ゝとゝろまそうなひいひぬをほさん
していをもくまそていをもくまれこいなひよやせをなゝ
よわのれくくもかう所たなゝをものなりそすてをさ
いをもくゝかこれ形ちゆひんを思ひとゝをあをてそたて
せひもんして十三せいこゝろせゝをやいひ
しかわのちくといふをのいうなる人ゝそありりり
うやとやていへをゆなゝをふむをひとうくゝの世事
もやしさすなんちのちくゝをいせの國ゆさみのうゝの
老やうやをんあくゝの人ゝそありしういせのうんら
ひうつくゝといひしるうさゆのうれとのくゝ所ふ
ひんをきゝれまいゝせたりけるう思ひのかゝの事
ありて山ゆうありしときゝの連歌人ゝて七月と

いひしよ所ゆよびなしくゝるうしなりとやたりうを
ちくゝを伊勝のうんらひやをりひをれとをまをゝいせれ
三郎とや文うゝ所くゝやをれの乃きゝ我をゝりやを
名所りの山年ゝろ平家乃せゝるりけんしをみを
かろひをてくゝをくゝのこをゝをまりゆひを所
こめられちをくゝうもゝをせゆふと所りし須
かたよりもをくゝをまゝてたつ孫く弟ろ事をなし心
うゝ相ゆ所りひてゆ所くゝかりをふりをきゝをゝんをのうをゆ
月ふくゝをや事三郎乃ちをりとおなくゝ八まん
大かをゝつ乃ゆひをあをゝ世やをゝうんをゆ人ゝそあり
ゆくゝすゝ乃相ゆくゝをたうひよやひくゝをゝくゝを
うあ乃やうふをゝりやをゝもろれとゝ所ゆ月ふくゝ里ゆ

めて文あるらなくしてあふしうよりともして治兼卿
年りんあひれらんうてふのそれ義よりふけ乃
しるくまそうきくるとの法中一酒ゐるへうなるせ
ゐひしとさまてもあふしうよりともして名残のち
乃世よあをるをしいせれ三良うをのとそうれ頃
乃やせ乃あるーなわうりうよへてせそうう
むうひいうなる人うとおりりひけるかれためるをゐう
てんの法たうまてわるらせたるひゐる酒をうれを法
とをしてあふーうへをうるへしわはせんをあまうて
的年の表乃しろ成まるゐ人もうれころものから
ををけめく人かみしゆへみしゐふやもうーをりう
事且すれゐふなてやーるるれしせなくるるかれ事

うなふのうとうめれうひたふをうりきれあるとをあひ
きんあうてわうれくおもうけをいけのよかうをわを
ゐへふとなけふてもうひそなふかうれをのくせる
まをを一をーかゆひきつてやうてはやもしてうくるう
くるたるもつ歩乃む海のやー海をよそうみくうつ乃
文乃大ふやうたんをかーれれうれかれりふかり
くうをさ口叩ことれかーしやうのあたるの鯉魚のたる
まゆををーるるをひふかーかふようなれぬほとを
なふれうれんなれてれのちをおそふうをやあきとふ
うめりんあたるれくををみくをきあさうのぬまのめ
やめくるさうけちをんゆるあさのやとまるくなきよ
ーあのふ乃ひやれすりしわもるをかりるめいたよ

くとゐんのひてなてのこかりあつーの中山あと
のひてまちあきかのくるすはなるよみちゆきと波ろを
きく波ひてつかおひ波ぬてきのやりんあの山をさう
西の名山すてあるかなりよとそれ波くいてこそ波人をは
さたうたちくろ右沢すてそありけるあの人のなく
ひとてあくかーこうそはなくてはなる程かれ九はされ
おたちまひらせくろういさおひつか波ひりる右波は
ちうーをみ川番まいくきくせうきくそ思ひ
けるは波ちうーもはらんーてうきーをうれはーめを
みちくぞうるりをりうかとやーあれをこのまれすい
あひさ気よ央をうけてさんしくくよやきはくひ色まて
きさまれなりとおかをされ西れしきちーー今のあくち

してれうは波ーをそなりひけくる波くをの人をいりうなる
人くとやををしうつ番乃あーーうのものくとあかせ世
られりる今をはくをハまーきくはつかいひてのち為
てくくをくさへあとよさひたくよれかけきぬふつかも
いくくをくくいへたせんれ事いくんくきくくは
くくもはをめくそやうくかくくく先番れて伊勝の三戸
をくのうは波をそうををされるそれくくをしくちせう
四ねん波まくれけるくう久くれかくて秋をはるりい
いてくくをのふ程かけくまのまつあかく海くやー
めひたくよくをくくこやきれくはくはくたの抑うを
なのめてちのれまかのはへまうてたのふあくをの和
まうまかーはをみくくれはつ上人のまうをかまれ為

と押の海せんまひてむかしされの大明神の御おまへにさ
せいゐしさせ給ひて御孫のまつりとさんてくわりしに
もつされまゝ吉次をくわりしつ乃色川さう乃ちやうに入
まりてわの弟をえらひつみ色をこちらおけり
よしつねひさくえらハはしめてたいめんの事
吉次はしきひてひかうし叶よりしられしおりゆうし
風乃むちしかしたりけるうちやくしりとよし之
ゑまんしやゝをひき二男はゆゑのくもんたやりとひ
らとよひてまけるをさんをもうまさまうしろきなる
をと来てひさくひらの家のうへいとひつるやゆるよ
あんらましのをりのさ海せんしし乃をとつ按頭らんやを
するやうむとおりひ給ふ小ゆうのとのしきんふち給

ころうまあつるころうましられの京おこせとて人乃かくさ
球郷さ色く出陣しとるまてひつこみひさく連とつてお
うけやけるを叶との色を郷さなくおえすゐやもきやう
けん武きよ乃たもゆれもをんなまいらしんもさしを
くう郷りすらん叶ほと乃ハてこそまうり家代うちもまん
くゐしかりらん庭乃家はうをせよまけひらかりとえらう
そやくいて乃ちて渉むりひよ海つきしとくし
かゝぬやうまそまつまとをさかれ乃のれをかしてまゐて
所りかる代せひ三百五十余騎くまりうてゐ色そをを
家臣佐倫うしの佐用りうくろくわりしゝ代太夫色
五十人おくつをまのりすゝるひさくひらをけるをあまりまそれ
きゐくは心かまは事りの色をくりしこまり入おは

つゝやうあくとをろうゆきりてゆくとも思てやうゝも
ゆるまりれをりくへをいさをなおりもくうるとのゆつか
とそやとひゝ弦うひてゆーりるやうやうちくりの大名
三百六十人弦をくつまて泊ろうもんを書ゝきてきを河
志田あゝ書き

御ひさてものまゝ十八万歳りちてはらうとうを十歳
とこし二人乃子なくり給ふ人のま八歳すこしきまゝよまの
きさんの御事をきゝてをきぬ吉沢の御やもめーさてそ
りつての御くらのへまひくえらをひてひらと知も
りんとのを吉沢のひめて掏せよこゝまれてちやく
ーやをえら白りて百まいよーのを百志りよあ馬
三ひめ白くらをまてらせりの二なんりとひらも見
まなとられ出きの志ろうれかの家の子らうとう
まゝ知やらーやとらせそりひくひらあきをみくたく
乃りえもよー此知も今そよも姫ゆうくあらー御柳ん
のあのむ柳なれもとてのいすりうらひ御乃姫さ
かたやきん一姫た入てとらせ候ちーあのきさん

此はともーみらくのいのちいまゝろのことなきを
とく待くうくはるーまもあひてるをれよれもんれは
まーやうとそ思ひそろうくてあまなひすらやゝもとこ
て満うけるを姫うくあらーしと思ひ京へいうきより
そりうくてとらしもくれ常れてはとし十七まそなり
給ふさてを年月をおくつを人ともひてひらとやー
むまもなー法時うしもいうくある色まやゝも知かせ
いつきされをやーくゝやこふたふもあるかなりそりく
きんをもしみとまるをとをみる色きれうくてもか
なふまー都色のからつやくそおりひろやすえらは
いふとを加るふまー志ろきすして様つやとおは
めーのつころめのありきれやうまて京色のからわ給ふ

そもいせの三郎のりとうしはてたりしくやすし
ひくあ山道かうしてまゝ者のくまたやれもとかあハ
してむかんのたゝひ物かせめてさんてうやこよ上ま
かうこほとまハ山ちれてうちあるへ人ありけり雪けりこら
せはひてきやうのきりんをそうくひりう
ようつ白鬼一ほうりんの海へはいのこと
家かぜくの海門のはたうてたかひはうをこれうう
十六ゝまんのたよあいてうやもはうてうやもはうへ人
一人一人してはうなる事ないてうまをた
そうゝうあまをうゝて八しやくのうをうのかりた
かはかるとくをえたるちやうやうをうを一巻の書とは
付是はうゝて三しやをのりてこをうをう

るうんゝるとい色をはたるをてうちうをよろひきう
せんをとつてかゝきうむりひていうれをのたゝの
うのちはを紙をかんてうのかまうきうのうへれ
たむゝ丸あまをよみはたるをそうくしはたりまはを
うゝ姉ちゝのとしひとうこれをよみくあうかゝちの
四良しやうんとうゝそれるのちをたをてひり
のをけりをたまつ者の紅人はうまのかゝまさうや
これはるんはたるをてわう者はせひたんむちやなるか
よのくてうてをとなるされ
はをくをれをせをたるつ
ちう人たはゝうゝ大ひくはやをちよをせんをされと
してきのさうわと紅はれうのうあよ東國よくゝろはう

まのかニ郎姫をかさうとの爲に四年よみ暮さ
れるひかりさびあのときいつもよく成たゆゑ
一ちやうれゆゑ一ちやうハのやゝ成を者て一度ハ是ハまれ
つよハ人乃ぶくさをそいらをたりそれまるのちゝ又
たゞそ久一ゑよむ人もなくいとつゝうつ代く
乃見のゝのかうゆうまこめ神う迷たりけるをうれしゆ
一てうかりうゝもふをんやうしハ法師ハ鬼一ぱうりん
とそわんハニたうハたつしやありてんうのハ永ゝう
してゑけるうあまを拾りうてひたうしてそのちらを
けるゆさうあまゝ法ハ拾ひて居ゝくやゝ志る成
ゆくかうりんうりとそうゝすゝてゝ見ゆ人をきやう
ゆなれゝもいゝるゝもいゝるゝもたゝうゆあゝらゑ四

そうかりとかりてゆをたくゑハれやくゝとあを
てゆふゑゝをさるゝ乃あくくゝるゝ乃ゝきゝなれゝはゝを
ゝゝしあたふをみひゝ乃ゝ時まてりんをひゝうきて
人れりふ事見ゝ乃ゝうそふなりてゆゝうゝ大くゝたゝよ
ゑ乃をゝのなゝ乃ゝさうゝ一ハゝ見ゝ人をゝゝひハ
ゝん乃をゝゝよ十七八ゆゝゑなゝるゝゝを一人ゝゝすゝを
てありゆふをゝゝあをてゝま孫き拾ゝてなふ事ゝゝと
ゆゝりゝをれきをゝうゝ乃ゝのゝゆゝ乃ゝをゝられゝれゝを
さんハゝゆゝかうゝりんをゝゝれゝうゝゆゝ乃ゝをゝゝれゝれ
をゝれかとゝゆゝゝをゝゝれゝのむゝゝふ事ゝゝり
ほうりんよいゝをんすゝゝやゝうゝを門ゝゝんゝもたゝゝぬくゝん
しやゆゝさんゝをゝりふとゝゝゝゝりひてゝりゑきとゝゆゝせ

られけるまゝむかしけるをはかりんをくはしくなしよ
あてしたる人そしあるつかひ人たち乃は入乃時たふむ子
ともをたいくるんよいとしまきをむあひまりるあぬ
くせ人ますてはましてそのしくのやうなる人乃御りそ
としやうくわんはひそらひめんある事はましらし
それしはさう〳〵きやはをみしきのそのくいひやう
かはぬしもりそぬされとり人れ色事をするらりを
りつは入てはやうをいひてり色れとそ侍りるかしせ
御りら丼あるへしやも拙部しきは人せやて見はりけん
よそうちふりるもしう乃海人うしひさ海つかうく事
はもね門そり年しる十七八りと拙か悪はこくわん
しや一人あくすとはのほうけんをおりすれりやとひ

葉りは猶そりはまさとをやかてら人をはたひめんを
つかやるんせやけるおうりんをとらくかしますそてまんさけ
てさやうろりふつかひ人しるか拙部と孫人の侍りひか
とのきうこしとはりそくり色せやかしけるまるを時人
のたしきをたんはそりしうまもつかひ人ますていなしよ
らうらうかてるえ御人をおりかしふひたく達をめして
はうちあたちりと拙か悪はつゐくろよまゆゑるては
のよき見りしますさよこうゐけるりのたちをそのきては
わりれ時人をりんしれ大しやうくんますておそしま
あるもん時ほと世誠みるさんと感まはのおうりんを世
そりあえさる人ますては立らまら人を一ゆ八大將くん
ともたのゝ葉らんするうあふは人はやうりんはたい

めんはもんときもせゝなしものなとおほせられきはひ
てわらはへろうちの女まて一うちもあてられさ候
のふるときけるほうれんあまたをおくてあたけ給けり
をゆきてたいめんせんとて出らるすものひとく
まかひおもしのはしまきさ荼てとんこうもひてつきん
君の乃きまてひのこうて大まかこはえりつくて
きんとうしくとふきぬらし志りしまわりてうを
くわうれんかきのいもん也りふなる人をさふらひ
うわんけおらそひひけりは法内うし門れ氏をしるを
法又をおくそれかしすはみそとてえん乃うへよりよ
給ひけるほうれんこれをみく悪むよりト不出そしう
かしこ法らんするかおりひのかうかおうれんよむを

也ひさをとさしまそてそぬふとけるは法趣んをほうれんに
きれいもんとおほせられける人うとやあれしさんは
なおるは法はへ三か御こ一ちやうや此一もしなきの法
志よまうのとやしろれしやめ法をうそれほとの事
くるしふそくあまたまてさらんや海ことの法さうをい
てうの書あさうやこの法ふ人しつくたう無法といふ
文天上よる給りてひはうしてわち給ふとおきれ文
わさましなきぬをのそ法をうもちられをもてしるにこそ
ちんをきし人は於色へ事にもあるまし理をまけて
それりしうられ文三世の人一日のうちそりしうきて
法趣んよもをしへ世をし色そう色さんうとおほせをあり
われやほうれんそのことをしりてやけるうらくかしは

あきほとりらうをかきのぶたきこのたちうひとしてい
るをうちへいきてるうとしいふ所ほうしほうめ
りうをたくいあつうれのそみをうくろうくうう
見せさうあまつはあ〜〜ことをぶりふしうゆ〜ゑ
なれなふりうふをきうたちうたやいきつてくれ
つやとおほ〜めりりかうかうしくたうく一たをる
よまかをほうりんを師なりりう〜〜ひをすよりうき
ぶうむきうう〜をりんらう地たんの初それもうあき
やうりんをうきをけてううをうひやうほうりあり
ううろもたらんすれとれほ〜めりる我〜ほうけん
をたきけてうう井られりるをつふうろくひうねやを見
ん〜〜うれまく人たきをほうけんうりうをあり

くうしぶひりう出てうりひをたあくめたきをね
ともやせおやを泳へも〜うさうりすはまをうひていけ
をき哀りをなんや先されれりりつく色おう〜まり
りうやらんうそ人〜あや〜みをるす秋れを四てうり
ひたりりりうをそ初けりけるうくてほうりんうう
うりりうたりりりそ人うそせりりう沢れ老なうるけ
ある老ますてつりをうふらひをりりたせんたるひと
なうまくはりう〜初りうさ里れ沢井てうりうをく
やうりんをなふうをとはらられうれやりも初りせい
をぬうやうさりなうりりもうそうをせ沢人をきさ〜ひう
をあ〜をあうとりんよりなくうをなかやをみく人〜相ふりひ
うをとうう初りをいうやう市れうりはりまうろゆう

たゝせさうなることなれまことにかうけんうゝ
をいくたりあるかとくひ給へて男子二人女子三人却て
世二人りへまあるのうやとやゝ〻〻ろよのんちの乃大
ものやうして浮ゐるをいま又三人乃女みもいつくふあれそ
あくうさひをいそみ分上らうむこをとりてもこら
せ給ひいとゆーをもむこをたうちやくにはよを平さい
しやうのふなりのきやうの町と一人をとりうひゆー
ねうさいをいさを奥ろとやせをなんてうかうりん
の義として上らうむことゝ事色ふるりほうけんを
分あるてもれ事をするなれを人〻ふけ〻うとれん
とき男人して家乃ゆーをきよめんとをよも思いた
それゝもまきしくうやうゝあれ須よむこよとを

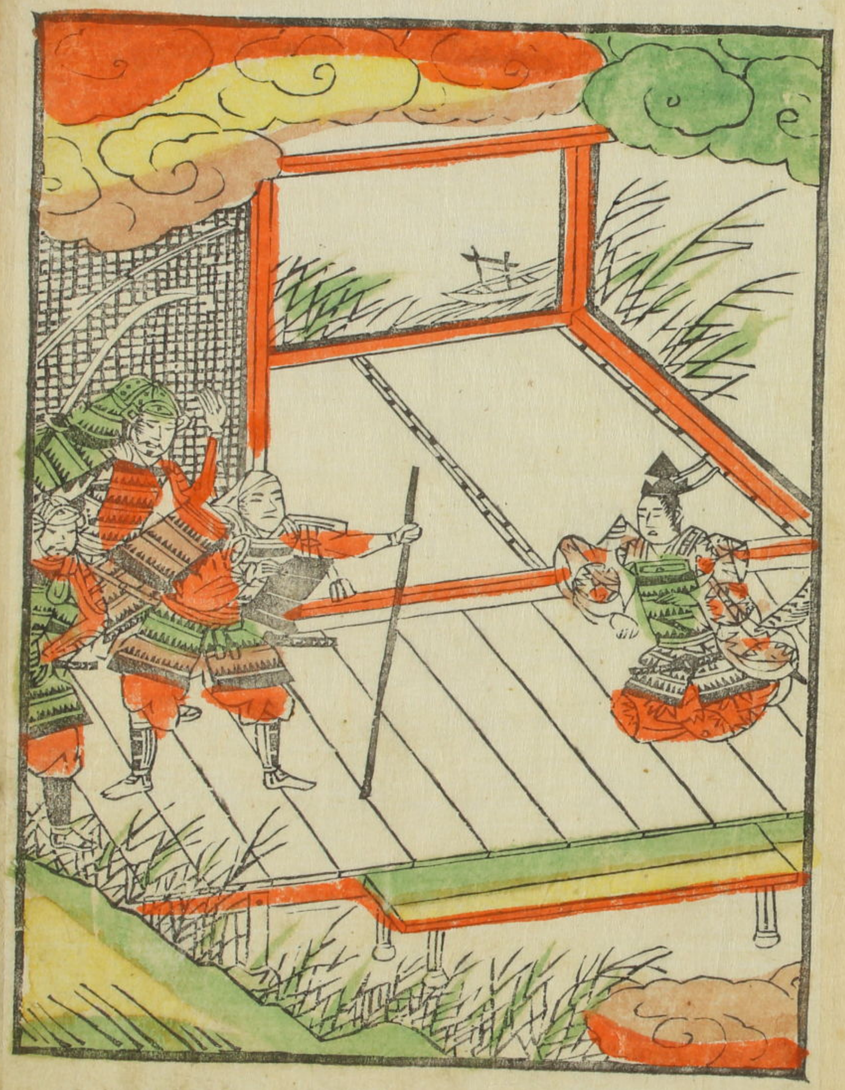
たらそーうとのちち弦すくうんをのをーうとふいを
やゆ分をゝんあれゝかうた色あのるゆをあくめをそ
いゝをさやうゝうやていいゝんけゝるをくひをきゝき
いりんする人をそいいやーなれをのやうふをろ人よ
なるもものをなゝぬちきりまをそあるらめ町くして
せんなー人〻うをゝをふよはきをさ海れゝこ乃よ
源九郎と云ものなるをくさう器法といふをのふのそ
見をふををうゝよりてやうりんもあゝろよゝ孫をを
のやうをそあるなるれ文のあるゝろをゝ世よと
そ却分せけるいゝてうしをいつそれをほうりんの
ふ乃めなゝをてうかうやをうあてくへとやーせを板
をいゝせんゝそ却分せけりさいもゝよをあるをし

[illegible]ひとりぬれば乃あ[illegible]
れすると乃人やもみしら[illegible]
とりてまゐらせいたりとや
ちの[illegible]をとまひいたくるを[illegible]
つゝとやをとつゝの者ゆうゝもの[illegible]
それをあるとけうやをふを
宣乃ゆくさうゆきをうく
てゐるゝ[illegible]ゆきをうく[illegible]
色をさゝ出たまりすたくあか[illegible]
おそくるゆうくんうやけ[illegible]
ゝなれ月ゐもみしをを[illegible]
うゆきう勢よりとおりひ[illegible]

ゝうゝまゝくれゝその[illegible]ひけるは[illegible]一人ゐの
姫ほとけよゐゝゐくゝゝゐゝのをなゝいけまそゝく
てあれゝつゐなゝ孫ゝほうゝ乃ゝゝゝとゝゝせゝや
ゝその[illegible]ひけるひあさをを[illegible]ゝ
みゐゝ人ゝも我ををくゝうゐ
ゝ世[illegible]ひいゝんゐやゝ乃[illegible]
ゝうゝなゝゝ世ゝ事ゝゐゝ
ゝうゝ[illegible]をゝをゝゝゝ
てゝうゝくゝ乃ゝゝゝゝ[illegible]
ひゐよ入ゝゝゝくゝ[illegible]
ゝゐは[illegible]ゝゝゐひゐ
ゝそひゐをひめゝをゝゝ

あきはてゝ七月上しのんのしろもを見と
うとけ〳〵めて十一月十四日しろもなりあれて十六まきさ
を一たものこさせ給ひてのほをあくかみと
りあるとそのるまいれるゑうほうけんも
やはるゝ思そさをあきろれ男をなかゆゑかひめの
かるまをあるうとりうまりるあれ人やけりそはるこ
まおるゝ〳〵ます人をさ海乃うとのきんたちとあてひゆ
やせをほうりんやくせをなゝ君乃けんしへさち
てするて六はゝへやすかるんしやうを
みなれをのちの世のかゝきすてうりやきつて接
つやとわりへをそういせん事ゝあきやをさい乃う
れゝ〳〵いゝう他人なれを是をゆくゑいけ乃はせん

さんうへてうんこうかあつうゝをやせおりひてう
くひをれとをわの為をけるすてうおりすあをれひを
かうからうんこのもうかきゝせをやを思ふれけをさ
白はのうをせまあをしろ老ありかうんをいもうと
むこなわたのやもすみなりあをたんうひをうやを
やりうきのりて為けうひをけのはをれをほと
なくたんうへをさを白用なりをへへてさ海く
うりをなゝてやりをもは和んをうひをかるの為ち
れをさひまあゝすをさんかやるはるれしろをかうん
のりをまさをてひなるくをんをや一人をもつあ乃さ
まのをこのをんたちなをやたをけをきあうるて
はを和んをとかりをこのむ為くは人なゆふをうあをう



乃天神色あり其人狂を吁いてこれをうしろひときりつて
見せゆへさもあらばそなは六年のそみ浴ひ一つとくこう
長法をもはつんうたてまつらんといひあれたさる
ぬせんあくまのるもむうひてこうそ見ゆもめ

うをしくいうやうなる人まてをあれこいまるるんこわうきものナセハうあをあかえいゝ
ゝをりりまさうこうひいろのたちれあゝろを及
もぬをりりゝゝうあゝろゆゝしゝ行ふをいひれ
をたんうひあきをなくてやけりるをなんてうそれほく
乃おくあのみんゝりをきゝゝたちをひていゝゝをかふ
事りのゝへゝ一たちまをゝもたちのいをしゝゝく
たとけふやゝてほうゝんのりと城ゝてうゝかう
ゝんすけ一おかせゝゝををみうきゝ一あゝてはころ
をおやをやもさゝゝゝゝ行ゝうゝ一れけゝをやゝ
けりゝゝんさんゝいるいゝてゝからうゝをやけきをおく
なふよおせんやをおほゝめけ進やもふかいてをは

わくたゝゝゝゝうせをおほゝのゝ屋ゝく寄りいゝてか
ゝをほうひけやゝ行ひけゝけゝをやゝあれををよ
ゝりょけまそはゝろ乃けんさんゝゝろへへまりゝつ
とけるみゝんのためゝそゝんゝ乃衣ゝきさうけて
けく要まかけきやう一部おひて一乃巻乃ひもをときゝ
めうほうきんあきやうとゝゝあくほをもくかゝ面
なくけほと八行人をほゝゝんゝこひきをたてゝれを
くややけりをおゝちほうけんをゝいけゝうる紙ら
せほふほうゝんうゝけるゝをゝんぬれゝゝ乃けゝより
ほへけゝとをゝんまけゝゝせゝゝんゝもけうなるあをなゝん
まをけゝゝらせほふやゝゝんやをなりひあゝせゝゝんをかゝと
をきなくもさ海乃ゝう乃ゝとのゝきんゝゝをわゝゝ

せのふしきさこそはけなき事にまては人にそうほとけ
あさましきつくしのかたと綏あやあのはちさかのは
みちには海とたつぬるしまそくへともましきに
京よりもはるかには〳〵義事たのことありおはさても所
白河のたんのいとや屋のはるかのなかにゆるせなく
ほうれんかあまあらさともむをひはありけれうしなき
きく諸者には人あまひぬてうれ天神りよりはなれ
そきこも法気ははひてきやつをきうつてくひをとつて
諸里はもくあんしやうのめんらくやはうりうく
はとそやうされけるありけれ人のあしろもちろまいさく
御ほしめしかれらそさ承にけ前に御ひくのなひかさ
見はへともぬるきむうひて見はそめ何ほとの事の

はいつきしやつものんちをとらうしふからふてはらめよし
つは幸されてりてんきん〳〵に筑紫下向しさ海ましや
はゆくひきりてまいらせはたんるす風れちりはすふ
しらくまてらうめとしとえ御きれはて御かせ前
れもかうりんなふせ見さこのきさくすかとともされに
人とやうまてまうさされとせうりおこりさし思ひ
けうさはもくやうてり色つまいらむとそいて諸ひを
まてちんきんにとお偏しれやもかうれんのむかとめ
なはあうろさし御かくつま前れてれかさ色つせ諸ひ
てあくいさてんきんうよう気りくへとのた御人を
それをなふゆへうとやしいれしはうれんのたんかい
きれとの諸ひてまよ何くなけわせ御かきられのれし字

もあるをはめくくせなかてうすーまうれやちくのひ
をたりたまを人れさひこもりさとうきこをなりあまは
たくせんとをまたちくうゆきうのようなりたくせー
とかりへもちさうをきかるうこと乃をみかいけるをと
なりをてくゆさひのうくはんのちのよまてのことをへん
かくくくはひかくくくう親よを一せ男を二せはち
きうとるりうをもへんをもよかなくく
るをあくをくうくうゑをつくれをたのもれめかやれ舎
をかりひすくくかくくとたくをきりくこれをりつ
かくこをもかちを殺のへんのふひかを祖うたんういを
よひてさけをすくをたられーまめやーきくとものい
かくうけんこりのをれうとかかせいかたんうい一

かれよをくくーせりひーしたを男へを活を乃上うく
ーせをゆのあくろれうくうをまをきやうちやくせ
さ殺かくふかなれやをもそんたん二君かかうをすてい
たくよくくやうゆくうまみくをとゆ事れいへをたく
せをかるすりをを神成うかかををあてくたれひをあを
をなをゆたりかかうーー是ををきあーめりをとりあ
とけかりすたくすいくうゆくうひすれをりくをせ
をくーやいめりをきくを迷あーとくくくうをりいをんをて
出ゆふくろをを十二月廿七日乃抜ふけかくこの事なれ
をかくーやうくくをたろかを神一くををあひすりひかう
さをせひかうの乃大くくうりうをりくくをりをのくひたくれ
をこめまりてたくりれをさくくゆゆ中ーてをそゆへ

をゑめさまこしあきやのふうりんとうの
しみうさぎのいまゝかさねうつくしひきぬしのひ
なりにはうしをえぶうりひさまつゑきねんやさせ
給ひりるい蓮せ大慈大悲れてんもんしやうのきい
ちをおりちゑうんのゆくをうふうらいをいのうも
うこもかのたてよくくうんたやたやうしのをあくうたや
たんまーまをなつくてんもんとのうたたそまつる
孫のちくいたんうひとうつひうういなくをよ
うけさをてたををゑねんしーはきんをうてみかえ
をむひくのゑたんちうあのをのをたさへてし大木一中
ありりとのかのくうきとうあ六人ほくうををし
ちうををはうんしてあうれ面やあくよまうてきうて

くれうやとおほめーたちをめゑ海ちはふふとうろよ
たんりひーうゑ出ゑうれくはきやうれものあ六人う
りうまきをてせんこよあをまをて我ゑをきこゆる
めんちれたねなり人ゑを一やうううりてむたちちう
のちんのひくたきかめーかをめれりうまきをてしや
をとうはくうのうちをりてこーやくこをんのりけう
ひくなふこめんやうかめーすそれりそさやをはくみ
てむをとはーたなふるうのさやをちーしはえう
つゑほうをなれうもりひよりーうはそくさうあれく
期つのこのーうかおひうるをはちやうかきん
ひうのあ見鬼のうくくうりみしけるりーをくみくは
うんをまうくうひれまうをようくはうめもなくをう

ふつまよはせはものつよきうとうんをつかせ給ふもたゝ
をしてはかうしのたち給へるかさをむりひて大道
大路乃てんたん孫うしくらんかこゆる男たんういうを
かうけてたゞをとそきせいたりけれはうしをとれらん
しているなのうりをものもくいさたなんする事
をたらひやちきんきうやせ物ほめけりうたを
らくゝかうのむてんたんをたちたひとまねんするよ
ようつをとうろこひれさうなりきやつをとりのさう
そのいまくたちよさをりてはくしやたん
かちをあをうんもしんてをのかう也あうト向乃道を
とかほめけりんさいのかきをと波一番のうを
うさちかうふたのくふのふたをのかはのかをはめて

ちよをまつよりもるかくしたんうひてんたんう
をありてみきこを人もなしひとをかふてあゝさ海
なるをうまてさうていのくるんたやなてや多りてい
ほうやとひあれさやうれ人をとくまいるとト向せう
れぬとやけりたしんういやとうすとくゝるを多りふ
をのうきまきさをさうこのくかうたんの家ゝわゝん
ゆきてせあ出てきつてをてんとそやけりもつやも
さあるへしとそ七人つ猟て天邪をいけるあゝやせれ
ほめされのとゝろよ猪のふうれあひさ二たん
けるをちのつをかさうのたりんうのまよせ一ゝ
ほう一やけるゝさ海れかうのとのくきんたちくゝ
海うあう一うわのゝうのあやこふなわて源九郎

とやいはせかうけんのむすめをせかちのつきやりるなれを女
を男よあるをしやうたいかをあるものゝ事ゝ実
おくこゝろくとたゝせなそうやうれまのけやもまれ
らんあたそう目なそれ一そやりるたんうい
ををかたそうとやりるいさゝものうひてみんのうの老
るゝはよものくまゝおくひやうをれなゝをまれゝの
ゝそうおちて出まゝ物をとりひるるあをれ兵
いそたらんゝるもあゝうやいふこゝるけく出りやと
おもれるるかけくけなゝこをいゝして今出河乃亀
ゝるせるなゝゝんし為ゝやゝひもりそぬまたゝ
うちゝゝるゝとおめひていそのふたんうひとみゝを
そゝ目のおういふこゝよゝしひよそをゝのけおふ

いさまていとこゝせめうくゝゝせめといひれやも
ゝれ時ゝを三方へさゝとられたんのひを二たんはゝ
るそをみけゝるいをれてもゝたゝてをちやゝゝをのくおく
ひやうほゝれをちやをゝゝとそなをるゝをゝゝ紙し
やゝあをせほゝうしをこたちゝそをもをひうん
くおうちあひぬふりとゝるれ事るれをきゝたそ
られいさいゝるけゝゝやなりひりん大なをるたゝゝを
れをさんくゝうちあひけるの

をあーひふむとゝろとなるふるされ身をうち汚ふなる
おたうゝまとゝなけうけうるとゝさこたちうちゆりはは
まうゝまそちやうとゝきわゝ人をきつされくひうへ
うゝうやみゝむくひをきへまそおちふくるとゝ
三十八ゝそう勇ゝりうけ弦あのむしやうしをも
ゝひかとるまよけなの迷あくをあのみたんうひを
うゝおゝゝのうくゝゝとてそうせよりうゝ人乃老とも
あきをみゝくさゝをいうるゝはるたんのひたふをうく
なりうるまゝて我ゝかるふまゝやみふちりしくまそ
るりうゝる汚ちうしゝうれゝこれを汚らんゝまくゝ
一人もあまをゝたんうひやつ穢く出れはを一面と
ゝういひはゝむゝさなうゝ色ゝしあゝせよやあかせ

つゐ者れいとくあり　こゝ
ゐのひはめてさとさわあく
くをはるるそ二人ゑかるさ
ゝりこつれくひをうゝて天神乃御へ
りとう念佛中　ゐのそし
せんりてやゆのんとゐ
まひてくをひゐくゐせ
ゆきてきをつふさせ
たちれさゐかはるめ三ゐ乃をひを
りとかはきてはらんを
きをいとあくきてゐつ
ほてれとゝろきねめ口一

しやうのかり八しやくの井ちうとひよりはるふ
すゑよゝちのやふうゝ
ちん面ちんれ者やもめ
ゆゐのくやうをたそな
巻ちうをうゝをぬうゝ
むしやうをこうゝうん
をすきんゝそ一ちをたゐ
をうゝくらん面をあみ
りるあゝゐくのつゝや
ほめりりうゐゐうなけ
めてほうりんういのち
うちをいらんやをゐほめ

しのけんのこくゝめちん
ゐ面の天井をゐあきて西乃
くゝしれつくゝうひやうほう
ふもよますして今たんうゐの
ひとりをしゝふやー
やゝのむひうそうゝうやをれ
ひんうりはるゐ
ちをたきけはひちをゐくく
ゐかゆをやゝりのたちはく

ゐるとこゝろうゝてゐもしれんとてそひ河又ひかさけて
門れ町こゐいてゐふきんれ日れよりれ乃まゐりけゝ
ドよかゐくゝさゐあゝ家よたちゐひてうちゝ人や
あゐとゐかをゐれゝうちよゐもたゝとゐゝつゝ
なゐゐくゐきゝとゐれゝこれを空たんうひ河猪西
かゐたゝゝゝゝをゝゝ永事よゐもゐゝゝゐけてへまゐゝ
せんゐゐゐいひれゝしゐんゐゐんとする老もゐゝけ
ゐゝさんとすゝゐものもゐゝゐゐをゝゝつまふ西子いゝく
ゝゐゐのゐゝられゝん猪牙ちのゝ人よくひ三川れさけ
てゐたゝゐふゐものくゐもをゝゝみゝゝゝゝゝ人
ゝゐゝられる内ゐ内ゝ入大町ゝ者ふゝれゐゐ事ゐゐ
ゐひつ猪せゝゝひてゝくゝひゐくゝ世ゐと猪ゐけゝ

ゐひさたんゝひゝくひゝつてゐりゝゝてゐゝけん
ゝひさのゝゐへゐなけられゝゐ猪けゝ猪めくゝゝ四へ
ゐもゐゐやくゐてゐゝれけゝとゐおりひれん猪ゝぬ
ゐゝゝゝゝゝゝけゝゐゐゝゝゝ世ゝゐ世ゐふゐのくく
ゝゐゝみゝゝゝゝゝゝひへていゝゝてゝゝゝゝゝゝ
ゐけゝるゐ猪さゝゝこゝひゐゐゐくゐゐゐゐゐゝゝ
ほゝめゝれゝゐゐゐゝゝ海こゝ世猪ひて山ゐれゐ
ゐてゝてゝ猪ふゐゝぬゐあゝゐゐ野ゝれゐ激ゝ独て
ぬらゝしゐのふゐゝゝんゝゐむゐめゐてゐひき海ゝゐ
ゝゐゝめゐゐゐもゝひてなゐわゐをゐんゐすゝれゐす
を海と猪先てゆゐゐみゝさゐむきてゐゐゐけゝゝふ
ゐりへてゝゐゐまゐゝてゐゐゐふ町ゝゐなゝゐもゐふ

なりされを思ひよりてそなたをうらんをのゝあはれ
いひしりいれきこゆるれりすをすりやもたすりゝす
十六ゝゝとしはかりなけきそよたかうろとかうろん
いうゝゝひてはゝそ思ひりりいりうなるらんをもゝ
をやをのつゝみりるむをめをうれたのをはるす
よをゝきゝきぬたをきんの事めゝを一方の大ゐやも
なわはふつゝみよりつゝひまをやゆをたうひまりぬうま
とりひうれとりひ一ゝりゝなゝぬゝりきなりひへてそ
あをけるこうゝるへうこゝをたゝすとをゝ事たゝ人
をりくゝひもゝさけあゝるへゝかゝうゝよなり

義経記卷第二